

月刊

2012

9
月号

みんぱく

特集

記憶をつなぐ

津波災害と文化遺産



記憶をつなぐ 吉田 憲司 | 民俗芸能と地域社会 橋本 裕之
震災と保存科学 日高 真吾 | 波の伝わる谷 小谷 竜介
大学生と取り組む文化財レスキュー 加藤 幸治 | 防災の英知を海外に 林 勲男

「商標」のデザインには、神話や伝説が深く張り付いている。旅先でも商品の中味よりもトレードマークにひきつけられ、財布の紐が緩くなるように動物の商標。逆さ蝙蝠のケース、テラや、駱駝のタバコ、太鼓に足をかけた獅子のマッチなどは全て外来種でわが国でもよく知られてきた。ヨーロッパとアジアをつなぐ「生命デザイン」を追いかけると、最も気になるのが「馬」に関わる商標である。デンマークの国立博物館の至宝「サン・チャリオット」は馬が太陽を牽つぱり闇夜から連れ還つてくる像で、紀元前二〇〇〇年紀につくられた。イギリスのウイスキー「ホワイト・ホース」はプリトン（ケルト）時代、石灰層に刻まれた巨大画に由来する。インドからケルト神話までの印欧語族あるいはそれを越えた「ユーロ＝アジア世界」でも、太陽エネルギーがホースパワーに結びつけられている。三〇〇〇年後の今日、石油会社に「太陽」のトレードマークがある。天の太陽と一体の火を噴く動力を暗示する。さて暗示的といえどヨーロッパの有名なチヨコレートの商標。重税に苦しむ民のため夫のマーシア伯に抗議し馬に乗せられ町中を引きまわされた裸の妃がトレードマーク。二〇世紀創業のベルギーの菓子会社が「馬と女性」をなぜ選んだのか。



「馬と女神」のユーロ＝アジア世界

鶴岡 真弓

プロフィール
多摩美術大学 芸術人類学研究所・所長。専門は美術文明史。ケルト文明や、ユーラシア文明の生命デザイン交流史を調査中。おもな著書に『ケルトノ装飾的思考』（1993年）、『ケルト美術』（2001年）。以上、ちくま学芸文庫、『装飾の神話学』『ケルトの歴史』（2009年）。以上、河出書房新社）『装飾』の美術文明史』（2004年、NHK出版）、『装飾する魂』（1997年、平凡社）、『阿修羅のジュエリー』（2011年、イーストプレス）など多数。

ベルギーはカエサル『ガリア戦記』にも記された「ベルガエ族」の本拠地で、ケルト、ガリア文明ゆかりの国だ。「ボヘミア」は「ポイイ」族、「パリ」は「パリシー」族などと同様ケルトの部族名をそのまま地名・国名としている。フランスと地続きのケルト考古学のスポットで、大陸のケルト文化をブリテン島に繋いだのがベルガエ族。ゴディヴァ伝説の奥にも、ガロローマ時代の「馬の女神エポナ」や、ウエルズ人の「馬乙女リアノン」が控えている。

彼女らは本来は太陽のように見えてはならない、触れることは許されないエネルギーであった。（キリストや聖徳太子のように）馬という熱と光に関わり生まれる皇子プリデリがウエルズの神話にも登場する。馬小屋の暗がりが高貴な皇子、光の子が生まれるという奇跡は、ユーロ＝アジア世界を、駆け抜けてきた。

ゴディヴァは裸体である。唯一彼女の輝く裸体を盗み見たのが「ヒープイング・トム」で、神の怒りで視力、光を奪われた。これは卑俗な覗き屋についてのおまけの逸話ではなく、馬と太陽の女神の超越性を示唆している。

最大の熱と光は、人間が征してはならないエネルギーなのだと語っている。ユーロ＝アジアの神話は現代にこそ宿っているのである。

月刊
みんぱく
9月号目次

- 1 エッセイ 千字文
「馬と女神」のユーロ＝アジア世界 鶴岡 真弓
- 2 特集
【企画展】 記憶をつなぐ
津波災害と文化遺産
- 3 記憶をつなぐ——過去・現在・そして未来 吉田 憲司
- 4 民俗芸能と地域社会
——岩手県沿岸部における秘密 橋本 裕之
- 6 震災と保存科学 日高 真吾
- 8 波の伝わる谷——開村伝承と津波 小谷 竜介
- 9 大学生と取り組む文化財レスキュー 加藤 幸治
防災の英知を海外に
——津波防災教材としての「稲むらの火」 林 勲男
- 10 研究フォーラム
制憲議会解散後のネパールを「包摂」から考える
名和 克郎
- 12 みんぱく Information

- 14 地球ミュージアム紀行
動かし続けることにこだわる博物館
工場から産業技術記念館へ
成田 年秀
- 16 連載リレー 知の収蔵庫
面白いモノ その1
ハレのかたちとしてのつくりもの
笹原 亮二
- 18 多文化をあきなう
救済から自立へのサポート
山岸 美穂
- 20 異聞逸聞
太平洋の島々における日本人移民の足跡
丹羽 典生
- 21 みんぱく私の逸品
男性用サンダル
吉本 忍
- 22 フィールドで考える
覚醒する自己——四川省郊外の客家意識
河合 洋尚
- 24 次号予告・編集後記

記憶をつなぐ 津波災害と文化遺産

多くの命を奪い、人びとの暮らしの場、学びの場、労働の場を破壊した東日本大震災発生から一年半。共同体の復興に向けての活動のなかで、心の拠り所となる祭りや芸能の奉納に、被災地の人びとは例年以上に力を注いできた。そして、この人びととともに有形・無形の文化遺産の保存と再生に取り組み、地域社会の復興の支援をしてきた研究者、学芸員、学生たちがいる。彼らは、祈りの対象である仏像、祭りや芸能で使われる衣装や道具、地域の伝統が刻まれた民具を、がれきのなかから救い出し、修復し、保存の方法を試行錯誤してきた。

モノの復活は生の復活をうながし、記憶の保存は未来の生を保障する。9月27日（木）から11月27日（火）に開催される企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」は、こうした復興支援の取り組みを紹介する。

津波被害の状況調査（写真提供・産業経済新聞社）



右：鶴住居（うのすまい）観音堂（岩手県釜石（かまいし）市、鶴住居）今回の津波で被災し、本尊の秘仏・十一面観音像も破損した。企画展では、修復されたその像を展示する

左上：宮城県仙台市、浪分神社。天保（1835）年の津波の際、この神社（当時は稲荷神社）のあった地より浪がふたつに分かれて引いていったという伝承をもつ。神社の名や地名もまた、過去の津波の記憶を伝えている

左下：大阪市大正橋畔「大地震両川口津浪記（りょうかわくちつなみぎ）」の碑。安政元（1854）年の安政東・南海地震の後に立てられた。現在でも、地元の人々の手で毎年夏の地藏盆の日に、碑の文字に黒い墨が入れ続けられている

記憶をつなぐ ——過去・現在・そして未来

よしだ けんじ
吉田憲司 民博文化資源研究センター

思い出の品々の回収

二〇一二年三月二日に発生した東北地方太平洋沖地震と、それに伴う津波による甚大な被害は、我々の社会に大きな試練をもたらした。原発の被害はもとより、地震・津波の傷は深く、「大震災」は現在進行中の出来事である。

地域コミュニティそのものの存続が危ぶまれるなかで被災地では例年以上に祭りや芸能の奉納が活発におこなわれた。鎮魂という意味もあったが、現地では、祭りをしないと、散りぢりになった村のみんが一緒に集まる機会がないという声をよく耳にする。また、流出した地域の民俗資料や人びとの思い出にかかわる品々の回収、保存の動きも、各地で積極的におこなわれた。人びとが祖先から受け継いできた有形・無形の文化遺産というのが、人間の生存にとっていかに核心的な意義をもつのか、その重要性をあらためて認識させられた。

こうした文化遺産の復興の背後には、さまざまな形の支援があった。わたしたち国立民族学博物館も、同じ人間文化研究機構に属する国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館などと連携し、復興の支援にかかわってきた。

震災の記憶のデータバンク化

企画展では、文化遺産の復興の作業に目を向け、わたしたちにとっての文化遺産の意義を改めて見直すとともに、その文化遺産を通じて、この地震・津波災害の記憶と経験をいかに未来に継承していくのかを考える契機

とすることをめざしている。

記憶の継承といえば、東北地方に限らず、日本の沿岸部には、各所に地震や津波の記憶を伝える碑や銘板などの遺産が遺されている。また、寺社の立地にも、過去の津波や地震の記憶が刻まれていることが多い。今回の津波でも、神社や寺院とその背後の土地は被災を免れた例が多数確認される。と同時に、そうした神社の例祭が、知らず知らずのうちに避難訓練になっていたことも見逃せない。今回の震災の経験は、津波碑や寺社が、遠い過去から伝えられてきた防災・減災のランドマークであることを気づかせてくれた。

企画展にあたり、こうした津波の記憶を残す碑や石塔、さらに神社に関する写真データベースを作成することとした。今後はそのデータベースを、被災地各地域のコミュニティ単位で過去の記憶や今回の津波の記憶に関するさまざまな情報や画像・映像を集積するためのプラットフォームとして活用し、それをネットワーク化することで、いわば震災の記憶のデータバンクを生み出せないかと構想している。そこからは、直接被災することのなかった人びとも多くを学ぶことができるに違いない。今回の津波の経験を、次の世代にいかに関承し、より安全な社会をどのように築き上げていくのか。それは、わたしたち一人ひとりに課せられた課題である。



岩手県宮古（みやこ）市重茂姉吉（おもえあねよ）の津波碑。昭和8（1963）年の津波の後に建立。「此処より下に家を建てな」の教えに従い、集落は今回、難を逃れた

民俗芸能と地域社会——岩手県沿岸部における秘密

橋本 裕之 はしもと ひろゆき 追手門学院大学教授・追手門学院地域文化創造機構特別教授

故意に凡庸な表題を掲げてみた。いかにも既視感に満ちた表題である。民俗芸能は今日でも地域社会に育まれて演じられている——。こうした語り口はあまりにも自明な印象をもたらすため、批判する余地を残していないようにも思われる。だが、わたしはこの文章において、紋切型の語り口を反復することを意図していない。むしろ反転させることをめざしている。というよりも、地域社会じたいが紋切型の語り口を反転させることを要請しているのである。

地域社会を育み、地域社会に育まれる

先日、勤務先の追手門学院が開設している大阪梅田サテライトにおいて、映像作家の阿部武司あべたけしが作成した「3.11 東日本大震災を乗り越えて」



「3.11 東日本大震災を乗り越えて—岩手・宮城沿岸部の民俗芸能 復興と現状—」

(東北文化財映像研究所、二〇一二年四月) を上映しながら解説する機会に恵まれた。阿部の作品は岩手県沿岸部において民俗芸能と地域社会が紡ぎ出してきた関係を焦点化しており、そこに隠された秘密が東日本大震災という極限的な状況によって逆説的に浮き上がってきた消息を映像に定着させている。

受講者の一人も「映像に圧倒されました。民俗芸能を復活することが震災復興の近道ではないか、と感じました」という感想を書き残していたとおり、岩手県沿岸部の民俗芸能は地域社会に育まれるものとしてのみならず、地域社会を育むものとしても演じられていた。地域社会を紡ぎ出す契機といってもいいだろう。東日本大震災以降にかぎっていえば、鎮魂や供養とい



『とりら』第6号特別編ふるさと岩手の芸能と震災

気高いものとして存在している消息を実感することができるといっわけである。

ふたつの神楽がたぐ、巨大な地域社会

今回の企画展もその趣旨において、同一線上に位置づけられるべきものである。わたし自身は民俗芸能を復興することが無形民俗文化財を保存することのみならず、地域社会を復興することをも意味している消息を展示に定着させる

ことよって、民俗芸能と地域社会が紡ぎ出してきた関係にまつわる秘密を一人でも多くの来館者に知らせる必要性を痛感している。

わたしは岩手の大学で教えていた当時も大阪に移った現在も、岩手県文化財保護審議会の委員を務めている。東日本大震災以降は民俗芸能支援に奔走してきた。たとえば、普代村の鶴鳥神楽と宮古市の黒森神楽は毎年、北回りと南回りを交代で務めながら、旧南部藩領に含まれる久慈市・釜石市の広域を巡行することによって、人びとに祝福をもたらしていた。だが、ふたつの神楽が巡行する村々は甚大な被害を受けて、ふたつの神楽を受け入れてきた宿も大半が失われてしまったため、世界的に見ても奇跡的な上演形態が危機的な状況にさらされている。わたしは東京都歴史文化財団とも連携しながら、とりわけ困難な状況に置かれている鶴鳥神楽の宿を支援する活動を継続してきた。

旧南部藩領の岩手県沿岸部は巡行するふたつの神楽によって、いわば巨大な地域社会として成立している。ふたつの神楽は岩手県沿岸部をつなぐ太い糸であり、岩手県沿岸部を照らす強い光であった。したがって、鶴鳥神楽の宿を維持することは、岩手県沿岸部という巨大な地域社会を再生させることを意味していた。だが、それは傷ついた地域社会の内側に人びとが集まる場を確保することによって、個々の地域社会を再生させることを意味していた。そうだとしたら、地域社会を紡ぎ出す契機として民俗芸能が演じられる可能性も、十二分に予想することができたはずである。

じつさい、わたしは二〇一二年一月二八日、鶴



釜石市箱崎町白浜の宿における鶴鳥神楽(2012年1月28日、千葉暁子撮影)



釜石市箱崎町白浜の宿における白浜虎舞(2012年1月28日、千葉暁子撮影)

鳥神楽が甚大な被害を受けた釜石市箱崎町白浜の宿で演じられたさい、地元の白浜に伝承されている白浜虎舞が奉納されるという印象的な光景に立ち会うことができた。こうした消息は鶴鳥神楽の宿を維持することによって、白浜虎舞が召喚されたという意味において、民俗芸能と地域社会が紡ぎ出してきた関係にまつわる秘密を反映しているようにも感じられる。地域社会を再生させる方策を講じるためにも、民俗芸能が演じられる場を長期的に確保することが要請されている。これが地域社会を再生させる計画の第一歩であることはまちがいない。



釜石市箱崎町白浜の宿における鶴鳥神楽(2012年1月28日、橋本裕之撮影)

震災と保存科学

ひだか しんご 日高 真吾 民博文化資源研究センター

東日本大震災では、人命をはじめ、甚大な被害が発生したが、文化財も例外ではなかった。これら被災した文化財のレスキューに対して文化庁は、国立の研究機関や博物館、あるいは文化財博物館関連の学会等を中心に支援体制をつくることを呼びかけ、「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」(以下、救援委員会)が設立された。そして、民博もこの救援委員会の一員として、おもに民俗文化財の救出・一時保管・応急措置のレスキュー活動に携わってきた。

民博と民俗文化財のレスキュー活動

民博は世界でも有数の民族・民俗資料を集積する博物館であり、収蔵資料が適切な状態を維持できるよう、保存科学を専門とするわたしや園田直子教授、ならびに情報企画課を中心にさまざまな活動を試みている。具体的には、湿度湿度の安定した収蔵庫環境の創出や、害虫やカビの発生を防ぐための生物被害対策、劣化の著しい資料の保存修復方法の策定などである。民族・民俗資料の保存・管理の方法は、素材がさまざまであったり、大量のコレクションを対象としたりするため、いわゆる優品として扱うほかの文化財の保存科学の分野と比較した場合、特徴的なものとなっている。

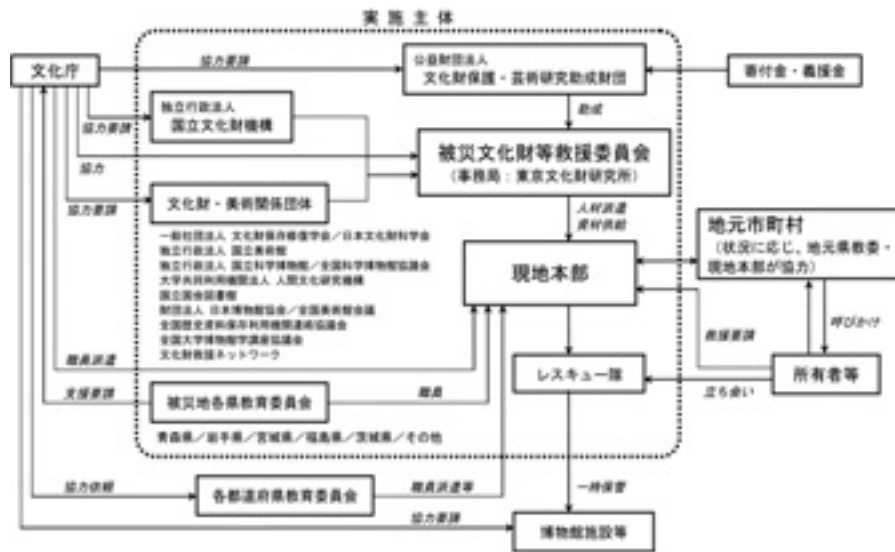
東日本大震災で被災した文化財でレスキューの対象となるものなかには、大量の民俗資料が含まれていた。そこで、大量かつ多彩な素材で構成される文化財の扱いに精通している民博は、必然的に民俗資料のレスキューの中心を担うこととなったのだ。

塩分への対応

津波被害が甚大だった今回の震災で、被災した民俗文化財の応急措置をおこなう際、一番考慮すべき要素となったのは、津波が運んできた塩分やヘドロの影響である。なかでも塩分は錆の原因になるほか、湿気と呼ばれるカビの発生を促す作用もあり、被災して脆弱な状態になった文化財にとっては大きな劣化要因となる。被災した文化財を安定した状態に戻すには、どこかの段階で、塩分を除去する脱塩処理をおこなわなければならない。

一方で、今回のような大規模災害では、大量の安定するのということも大きな課題となっている。文化財の適切な保存のあり方を探求する「保存科学」。東日本大震災で被災した文化財の再生を目指す今、ますます果たすべき役割が大きいと考える。

東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会(文化財レスキュー事業)



東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会の組織図

民俗文化財に対して、応急措置として脱塩処理がおこなえる環境があるのかという問題があった。脱塩処理はアルカリ性の溶液、もしくは水道水から塩類や残留塩素を取り除いたイオン交換水などの脱塩液に、文化財を浸漬して内部の塩分を除去する方法であり、その実施には水槽が大量に必要なほか、廃液できる環境を整えなければならぬ。また、脱塩処理終了後は、乾燥させるための安定した環境も必要となる。これらのことから、脱塩処理を応急措置として緊急的におこなう必要があるのかどうか大きな判断の分岐点となったのである。

この点についてわたしは、今回の応急措置では脱塩処理をおこなわないと判断した。前述した



一次保管場所への文化財の移動

ような脱塩処理をおこなう環境が整っていないかつたこともある。しかし、もっとも大きな理由は、救出した民俗文化財の表面に付着した砂やヘドロといった汚損物質の除去を最優先におこなうべきと判断したからである。これらの汚損物質は、生乾きで砂まみれの民俗文化財のカビの繁殖を促進し、深刻化させていたほか、その悪臭や、移動させるたびに落ちる砂やヘドロが、一時保管場所を汚損させていた。そこで、今回は、一次洗浄として、刷毛やブラシなど簡単な道具だけで落とすことができる、砂やヘドロなどを除去し、乾燥させることを優先した。このことにより、それほど専門的な技術・知識をもっていない多くの人がいつでも一時洗浄をすることが可能となった。その結果、救援委員会の一員である日本博物館協会より派遣いただいた多くの学芸員諸氏をはじめ、地元の大学として救援活動に参加いただいた東北学院大学の学生とともに、多くの民俗文化財の一次洗浄を実施することができたのである。

被災した民俗文化財の今後

現在、救出対象となった民俗文化財は一時保管場所において安全に管理されている。しかしながら、塩分の問題が解決したわけではない。これから、被災した民俗文化財がどの程度の塩分を含み、具体的にどのような劣化が進んでいるのかを科学的に明らかにしたうえで、適切な脱塩処理の計画を立てていく必要がある。また、湿度湿度のコントロールができない一時保管場所での管理が長期化することが決定的となった今、どのような対策を講じれば、保管場所の環境が



一時保管場所の紫外線調査



応急措置でおこなった水洗作業



がれきに埋まった文化財収蔵庫の内部

波の伝わる谷——開村伝承と津波

小谷 竜介 宮城県教育委員会

三陸海岸の南部、南三陸町戸倉波伝谷地区は、東日本大震災で地域の鎮守、戸倉神社の社殿を

残してすべてが津波の被害を受けた。波が伝わる谷、というこの集落には名前のもととなった開村伝承がある。戸倉神社の縁起には、一夜にして丘が隆起し、大波が押し寄せ、停泊していた船にのった鹿島の神があらたに隆起した戸倉の山上に流れ着いたとある。この隆起した山と一夜の波は地震と津波が想像され、それにより、神社の鎮座する場所ができたという伝承である。また集落の名もこの波により定まったとある。

このように、波伝谷には津波にまつわる開村伝承があり、歴史的にも津波とのかかわりのなかで暮らしが形作られてきた。今回の震災により、家並みは失われたが、神社裏の高台などへの移転事業が進みつつある。この波伝谷には春祈禱という獅子舞を伴い、集落の家々を巡り魔除けをおこなう行事が集落の戸主たちでつくる契約講を中心におこなわれてきた。一時存続の危ぶまれた契約講も再開を決め、行事もおこなうことになった。幸い獅子頭は戸倉神社に納められていたため無事であり、今年の四月には行事も仮設住宅を回る形ではあるが実施することができた。集落の景観は変わるが、契約講とともに波伝谷は今後も続いていく。我々は再建され

る集落のあり方を見つめながら、伝えられてきた歴史もまた引き継いでいく必要がある。



仮設住宅でおこなわれた春祈禱



戸倉神社で、かつて使用されていた獅子頭の修復作業をおこなう日高真吾准教授。地震により破損していた右耳を接着・補強したあと、企画展でも展示される

なお、震災前の暮らしのあり方については、以下のURLより調査報告書をダウンロードできる。
http://www.thm.pref.miyagi.jp/media_files/cms/upfile/333/hadennya_minzoku.pdf

防災の英知を海外に

津波防災教材としての「稲むらの火」

林 勲男 民博文化資源研究センター

主人公の五兵衛が、長くゆっくりとした地震の揺れを感じた直後、津波の襲来を察知し、収穫した「稲むら」に火を放ち、その燃え盛る炎で海辺近くの村民を高台に避難させた、というこの物語。防災教育関係者のあいだでは以前からよく知られていた。

安政南海地震発生時（安政元（嘉永七、一八五四）年一月）に、ヤマサ醤油七代目当主であった濱口儀兵衛（一八二〇—一八八五）による実話に基づいている。それを小泉八雲が明治三陸地震（一八九六年六月）に触発されて英語の作品とした。それをさらに、和歌山県出身の小学校教諭・中井常蔵が児童向けに翻訳し、国定国語教科書の教材募集に応募して入選し、一九三七年から一九四七年まで尋常小学校五年生用の国語教科書に「稲むらの火」として掲載されたという歴史的経緯も興味深い。

東日本大震災の発生以前に、小学校の教科書への再掲載は決まっていたことだが、二〇一一年以降、さらに多くの人びとに知られることとなった。とりわけ、儀兵衛が被災した村人を雇用して堤防工事に従事させたことは、現在の被災者への緊急雇用対策と共通するものであり、開発途上国での災害や紛争後の支援策としても注目された。キャッシュ・フォー・ワークの先例としても注目された。

日本で教科書に復活するよりも前に、この「稲むらの火」の物語が、バン格拉デシュ、インド、インドネシア、マレーシア、ネパール、フィリピン、シンガポール、スリランカの八ヶ国・九言語に翻訳され、防災教育教材として活用されている。これはアジア防災センターが内閣府の委託事業として、二〇〇四年二月に発生したスマトラ島沖地震とそれによるインド洋大津波災害の被災国を中心に、防災教育普及の一環としておこなったものである。それぞれの国の歴史や文化を踏まえて、翻訳・イラスト・印刷のすべてを現地でおこない、物語の紹介に加えて、津波に関する基礎知識も掲載している。企画展「記憶をつなぐ」では、翻訳されたすべての教材が展示されるが、大切なのは、こうした教材があることを知る、あるいは知らせることだけにとどまるのではなく、実際の防災教育のなかで活用することであり、そのための方策を考えることである。

大学生と取り組む文化財レスキュー

加藤 幸治 東北学院大学准教授

東北学院大学博物館では、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会の文化財レスキュー事業における一時保管施設として、石巻市文化センター所管「鮎川収蔵庫」の考古・民俗・地学資料を一括受け入れた。考古学、民俗学あるいは自然史といった各分野の専門家で組織されたレスキュー隊による現地での救援作業は、震災発生後三ヵ月以上経過した六月後半に実施され、民俗資料約三三〇〇点のほか、多数の考古・地学資料が救援された。洗浄作業は現在も継続中であるが、のべ八〇〇名を超える大学生がそのクリーニング作業に従事している。

「鮎川収蔵庫」の資料の大半は、牡鹿半島における生活の歴史の一端を示すものとして収集された民俗資料である。しかし民俗資料はどのように製作され、生活のなかで使用されてきたかを知る背景情報が不可欠である。津波の圧力でほとんどが破損した状態にある民俗資料は、データがなければ、がれきと区別することができない。

継続的に洗浄作業に携わってきた東北学院大学の民俗学ゼミナールでは、本年八月に被災地に赴き、移動博物館を実施した。一月には仙台市内で中規模の展示を企画している。救援した被災資料を展示し、そこで学生が人びとに聞き書きをするこのプロジェクトは、資料の現地への返却までの三年間に渡って継続的に実施する予

定である。

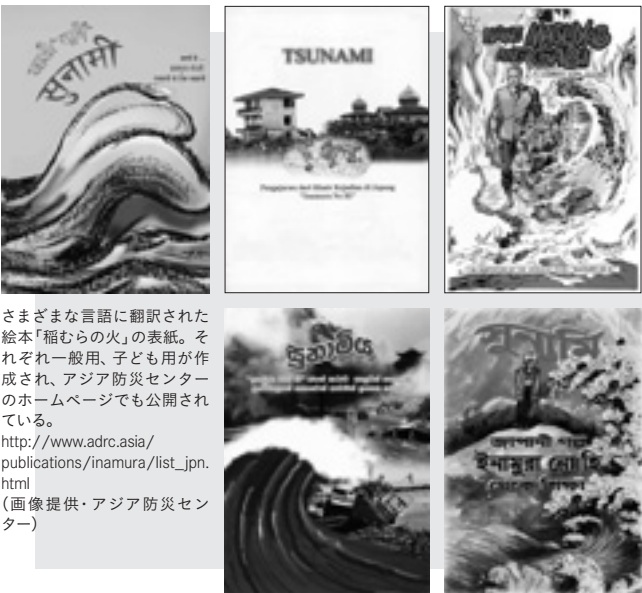
人びとが、資料に対して何を語るのか。単なる道具や在来技術の説明にとどまらず、過去の生活と現状とを対比させたり、地域の変化に対する認識を吐露したりするなど、従来の民俗調査のデータとはかなり異質なものになるであろう。文化財レスキューは、物質的な保全活動からあらたな意味の創出に向けた活動へとシフトしつつある。

今後の展覧会の予定

「東北学院大学博物館 文化財レスキュー展 in 仙台」
期間：平成二十四年二月六日（火）～八日（木）
場所：仙台メディアテーク（宮城県仙台市青葉区）



学生たちが洗浄した民具の一部は、企画展でも展示される



さまざまな言語に翻訳された絵本「稲むらの火」の表紙。それぞれ一般用、子ども用が作成され、アジア防災センターのホームページでも公開されている。
http://www.adrc.asia/publications/inamura/list_jpn.html
(画像提供・アジア防災センター)



制憲議会解散後のネパールを「包摂」から考える

なわかつお
名和 克郎

東京大学東洋文化研究所准教授

現在体制転換期にあるネパールでは、多種多様な集団の存在を前提としてさまざまな政治的主張が展開されているが、各々の集団に属するとされる人びとの生活や思考は、必ずしもそうした主張に全面的に合致するものではない。本研究は、近年ネパールにおいて急速に普及した翻訳語サマーベシーカラン（「包摂」）を鍵概念として、両者のあいだの関係と齟齬を検討し、ネパール社会の歴史と現状に関する統合的理解を提出することを目指している。

できなかった新憲法

西暦二〇一二年五月二十七日をもって、ネパールの制憲議会は任期満了となり、解散した。

二〇〇六年、大規模な民主化運動により国王が権力を手放し、十年にわたるマオイスト（ネパール共産党毛沢東主義派）の「人民戦争」が和平合意により終結した後、紆余曲折の末、ようやく二〇〇八年四月一日に制憲議会選挙がおこなわれた。しかし、その結果成立した制憲議会は暫定憲法に規定された二年間に新憲法を作ることができず、数次にわたり延長を繰り返していった。ネパール最高裁が議会延長はあと一回、六カ月以内に限られるという判決を二〇一一年一月に出して以来、期限の存在はすべての当事者にとって議論と交渉の前提となった。にもかかわらず制憲議会は、自らの手で新憲法を作りあげ、ネパールを次の段階に進めることはできなかったのである。この事態の背景は単純ではないが、新憲法をめぐる議論で最後まで明確な対立点として残ったのは、連邦制となる筈のネパールを、いかなる根拠でどのように州に分割し、各州をいかに名付けいかなる権限を与えるかという問題であった。具体的には、いわゆる民族州を認めるか、認めるとしたらどのような形か、が主要な争点となった。「多民族、多言語、多宗教、多文化」



マオイストの横断幕、選挙後、カトマンドウ

と暫定憲法に明記されたネパールにおいて、それぞれ具体的な選挙区を地盤とする個々の政治家が、こうした問題に関して、所属する政党の主張とともに、自らの民族的・地域的出自や、それと結びついた選挙区の人びとの意志をも考慮して行為するであろうこと、あるいはそのように広く信じられたことが、とりわけ制憲議会の最終局面で大きな意味を持ったようである。いずれにせよ、新憲法ができなかったことで、問題は、解決への道筋が見えない形で、先送りされることになった。

「マイノリティ」を巡る諸問題

政党政治が復活した一九九〇年以降のネパールにおいて、「マイノリティ」をめぐる問題は、多くの研究者の関心を集めてきた。だが、ネパールのマイノリティ問題の構成

自体が、民族、カースト、地域等の問題が複雑に入り組んだものであったこともあって、当初から事態は錯綜した展開を辿ることとなった。当時の主要議会議政党がそうした主張を十分に取り込んできたとは必ずしも言えず、またタライ（インドに続く平野部）を地盤としたサドバウヴァナ党がそれほど支持を伸ばせないなど、国政レヴェルの政治との関係は微妙であった。むしろこの問題を表だして主張したのはマオイストであり、「人民戦争」を開始する直前に首

民族自治区を（その多くは名目的なものであったにせよ）設立したりもした。ネパール政府の側も「先住民族」や「ダリト」（不浄として差別されてきた人びと）に対する政策を本格化させていった。そして、停戦合意から制憲議会選挙に至る時期には、「マデシ」（タライの人びと）をめぐる問題が、全国を巻き込む形で顕在化した。

「包摂」の政治の裏から

相あてに出した四〇項目の要求において、すでに民族、カースト、地域、ジェンダーといった領域における問題を指摘し、民族自治にまで踏み込む主張を盛り込んでいた。また実際マオイストは、「人民戦争」中に

「サマーベシーカラン（包摂）」は、このような展開の中で、インクルージョンという英語の翻訳語として、当事者の主張と状況の分析の双方において広く用いられるようになった概念である。この語は、正面から否定しがたい価値を帯び、国際的に広く流通する議論と結びついているうえに、来るべき新しいネパールのイメージとも適合的であった。さらにこの語は、広く議論されてきた「マイノリティ」のみならず、従来問題にされてこなかったさまざまな括弧の人びとに対しても用いうる概念でもある。他方、「包摂」の後に何が来るのかは必ずしも明白ではないし、すべての人がまったく同様に議論の場に参入しているのではない以上、「包摂」の語を用いて主張し、議論してきた人びとと、そうした議論で「包摂」されるものと想定されている人びととが、完全に一致することはない。このこと



2008年制憲議会選挙、開票の様、パンケ郡

は、誰がいかなる根拠でどのような人びとの集合を包摂しようとするのか、という問いを呼び起こす。本研究では、ネパールおよび周辺のそれぞれ特定の社会と長期的に関係をもってきた研究者が、「包摂」を論じる人びとのみならず、「包摂」される対象とされた人びとの側からも状況をとらえることで、混迷する政治過程の背後にあるネパールの社会動態の最新局面とその歴史的背景を、多面的に明らかにしていきたい。

共同研究

「ネパールにおける『包摂』をめぐる言説と社会動態に関する比較民族的的研究」

代表：名和克郎

2011年10月～2015年3月



2008年制憲議会選挙、投票所の様子、パンケ郡

特別展

「世界の織機と織物」

織って！みて！織りのカラクリ大発見！
ヨーロッパで紀元前から使われてきた錘を使った織機、カナダの少数民族「マヤ」のヤマアラシのトゲを織り込んだ織物をはじめとして、世界各地の多種多様な織機と織物を紹介します。会場の2カ所では、さまざまな織りのカラクリも体験できます。

会期 9月13日(木)～11月27日(火)
会場 特別展示館および
本館1階エントランスホール

■関連イベント
◆ワークショップ
◆ミニレクチャー

◆みんなくセミナー
◆みんなくウィークエンド・サロン

開催日時など詳細についてはチラシ、ホームページ等で確認ください。

企画展

人間文化研究機構連携展示

「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」
この企画展では、私たちにとっての文化遺産の意義を改めて見直すとともに、その文化遺産を通じて、この震災・津波の記憶をいかに未来に継承し、次代の社会を築き上げていくのかを考える契機となればと願っています。

会期 9月27日(木)～11月27日(火)
会場 企画展示場

みんなく映画会/みんなくワールドシネマ
「君を想って海をゆく」
日時 9月22日(土・祝)
13時30分～16時30分(13時開場)

場所 講堂(先着450名)
※参加無料、申込不要
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

「第3回現代インド・南アジアセミナー」
実施日 9月22日(土)、23日(日)、24日(月)
時間 13時30分～18時30分(予定)
会場 第5セミナー室
定員 70名

※参加無料・要申込(9月9日応募締切 先着順)
研究公演
「遠い記憶、呼びさます声——ダンナムル家の南インド古典音楽」

インド古典音楽では音楽が最も重要ですが、日本にはシタールやタブラなどの楽器が主に紹介されてきました。この公演では、20世紀はじめに活躍した大演奏家の流れをくむ南インドの音楽をご紹介します。

日時 10月14日(日) 13時30分～16時(13時開場)
会場 講堂(定員450名)
※参加無料・要申込

申込締切 9月27日(木) 申込ハガキ必着
公開講演会
「だから人類は地球を歩いた——太平洋へアメリカへ」

アメリカで誕生した人類は、ユーラシア大陸を経て、南アメリカ大陸やイースター島にまでどうやって移動したのでしょうか。最新の研究成果から、その壮大な移動の足跡をたどります。

日時 10月26日(金) 18時30分～20時40分(18時開場)
会場 日経ホール(東京都千代田区大手町1-13-7 日経ビル3階)
定員 600名
※参加無料、要申込

みんなくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第412回 9月15日(土)
「特別展「世界の織機と織物」関連
手仕事への回帰」

講師 吉本忍(国立民族学博物館教授)



アイヌの刀を吊るす帯(エムシアン)の機織り

人類史の中枢技術として位置づけられる織りの技術は、産業革命以降に人類が手仕事を放棄し続けてきたこと深くかかわっています。その歴史の経緯と現代社会が直面する危機的状況、そして、全人類の手仕事への回帰の必要性についてお話しします。

第413回 10月20日(土)

「特別展「世界の織機と織物」関連
パントウの人びとのラファイア織り」

講師 井関和代(大阪芸術大学教授)



「軍ビロード」の布で知られるクハの杭機(くいばた)

マダガスカル原産のラファイヤシの葉織維から布を織るパントウ語族の人びとは、中央アフリカのコンゴ盆地からカメルーンのパメンダ高原に分布しています。彼らが使っているラファイア機について紹介します。

国立民族学博物館友の会 電話06-6877-8893(平日9時～17時) FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/ e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員証提示)

第412回 10月6日(土) 14時～15時
「特別展「世界の織機と織物」関連」

講師 吉本忍(国立民族学博物館教授)
世界の織機と異形の織物

世界各地では、さまざまな織機を使って、さまざまな織物が織られてきました。今回は、それらのうちから、輪状、楕円状、管状、丸紐状、ひだ状、交叉状、フオーク状、うろこ状、袋状などの異形の織物と、それらを織る織機を紹介します。

第413回 11月3日(土) 14時～15時
ビデオトークより
祭礼の変容を映像で見る

講師 インディ・グジャラートの女神祭礼
三尾稔(国立民族学博物館准教授)

宗教祭礼は永続的なものと思われがちですが、急速に変化することがあります。インドの女神祭礼の資料映像を見ながら、何が、なぜ変わるのか。また、それでも変わらないものは何かを解説します。すでに公開されている番組と、制作中のものを比較しながら考えてみます。

第66回体験セミナー

「企画展「記憶をつなぐ」関連
「稲むらの火祭り」訪問と
企画展および関連催し「鶴鳥神楽」見学会

震災の記憶を世代をこえて伝えるための方策が問われています。その事例のひとつである和歌山県広川町の「稲むらの火」の逸話を伝える祭りや町での取り組みなどについて現地で学びます。翌日は国立民族学博物館に企画展および関連催し「鶴鳥神楽(岩手県)」を見学します。

開催日 10月20日(土)～21日(日) 1泊2日
講師 日高真吾(国立民族学博物館准教授)

参加費 25500円(宿泊費など含む)
定員 25名(先着順、最少催行人員13名)
申込、問合せは上記「友の会」まで。

●無料観覧日のお知らせ

9月15日(土)は万国博覧会閉幕記念のため、9月17日(月・祝)は敬老の日のため本館展示および特別展示を無料で観覧いただけます。ただし17日については自然文化園(有料区域)を通行される場合は、入園料が必要です。※イベントや刊行物について、くわしくはホームページをご覧ください。

※電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時(土日祝を除く)です。

『月刊みんなく』編集室編
『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』
丸善出版 定価:1,995円
本書は、みんなくの広報誌『月刊みんなく』に連載された「生きもの博物誌」より食物をテーマにしたエッセイを抜粋したもので、文化人類学者が体験した食文化の民族誌である。

池谷和信 編
『エリア・スタディーズ 99 ポツワナを知るための52章』
明石書店 定価:2,100円
南アフリカの北の内陸国ポツワナ。有史以来ほとんど戦争が行われたことのない平和な国であり、安定した政治経済とともに豊かな自然環境を保持している。紛争や貧困を連想しがちなアフリカ大陸とは一味違う、もう一つのアフリカの姿を様々な角度から紹介する。

ベン・グロー＆スーレシュ・K・ローダ著、岸上伸啓 訳
『格差の世界地図』
丸善出版 定価:2,980円
本書は経済のみならず、権力、社会、ジェンダー、教育、環境におけるさまざまな格差をグローバルな視点からグラフや数値で示すことにより、世界の格差の現状を目で見て理解できるように紹介している。

ビデオトーク新番組(9月公開予定)

番組番号	タイトル	時間(分)	監修者	地域	番組種別
1705	アメリカ先住民 ホビの銀細工づくり：銀板に重ね合わせる伝統	24	鈴木紀、伊藤敦規	アメリカ	短編
1318	イスラム教の礼拝と巡礼	14	国立民族学博物館	西アジア	短編
1702	バスニ・カラン村の領土のくらし	15	三尾稔	南アジア	短編
1703	バスニ・カラン村の女神祭礼	26	三尾稔	南アジア	短編
1704	ラージャスターンの戦士の霊 サガスバウジー	32	三尾稔	南アジア	短編
7218	ウダイブルの女神祭礼	74	三尾稔	南アジア	研究用映像
3694	Kulintang : Gong Music from Mindanao in the Southern Philippines	23	Usopay Hamdag Cadar, TERADA Yoshitaka	東南アジア	短編(英語)
8007	Kakoolintang o Manga Meranao	23	Usopay Hamdag Cadar, TERADA Yoshitaka	東南アジア	短編(マラオ語)
7158	ものとかぞく：「2002年ソウルスタイル」の記録	50	朝倉敏夫、佐藤浩司	朝鮮半島	研究用映像
1700	雲南省ペー族の葬式	20	横山廣子	中国地域	短編
1701	誰も知らなかった国トウバ：研究者はなぜトウバへ行ったのか	20	小長谷有紀	中央・北アジア	短編
7219	トウバに魅せられた人々	63	小長谷有紀	中央・北アジア	研究用映像
1707	被災した民俗資料の保存修復：石川県穴水町指定「明泉寺台燈籠」	24	日高真吾	日本/中部	短編

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ
電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

岩手県・山田の醤油

9月27日(木)から企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」が開催されます(11月27日まで)。この企画展にあわせて、ミュージアム・ショップでは会期中、岩手県山田町にあって、東日本大震災による津波の影響で壊滅してしまいましたが、「山田の醤油」は内陸の工場で作っていたので無事でした。味は甘めで、白身魚のお刺身や煮魚、肉じゃがなど和食の味付けに最適です。この機会に、ぜひ東北の醤油を味わってみてください。

山田の醤油
1リットル 398円
100ミリリットル 100円
価格はすべて税込

動かし続けることにこだわる博物館 —工場から産業技術記念館へ

成田年秀 なりたとしひで
トヨタテクノミュージアム
産業技術記念館副館長



織維機械にはじまり、自動車産業へ展開していったトヨタグループの技術の変遷を、動態展示とともに紹介するトヨタテクノミュージアム産業技術記念館。

約一〇〇年前に設立された工場を利用した記念館は、親子二代にわたつての「モノづくり」への思いが、いまでも息づいている。

工場の建物を活用した博物館

名古屋駅から名鉄でひと駅、歩いても二十数分。駅前の喧騒からノリタケの森を越え、閑静な住宅商業地のなかに忽然とあらわれるレンガ造りの建物が産業技術記念館である。ここはトヨタグループの創始者豊田佐吉が、織機を開発するための試験工場として一九二一年に設立したのがその始まりで、最盛期には従業員が二〇〇〇名を超える大工場であった。

赤レンガの壁、採光を考慮したノコギリ屋根、内部は木造柱が林立する大正時代の典型的な工場建築であり、貴重な産業遺産でもある。ここでは当時の建物を極力残しながら展示場として活用している。また敷地内にある旧本社事務棟は一九二五年に建て替えられた初期の鉄筋コンクリート造りで、外壁の表面は「洗い出し工法」という職人技で作られている。ここでは建物をみるだけでも楽しい。

本物の機械による動態展示

さてこの記念館では、生涯を織機の発明に捧げた豊田佐吉の「研究と創造の精神」と、彼の息子で、織維機械から自動車産業への進出という親子の夢を実現した豊田喜一郎の「モノづくりの大切さ」を、実際の機械を動態展示することで紹介している。

豊田佐吉は一八九〇年、彼が三歳のときに最初の木製人力織機を発明し、それから三十有余年かけて少しずつ織機を改良、そしてついに一九二四年、無停止杼換式豊田自動織機（G型）を完成する。

その性能は当時世界一と評され、一九一九年にイギリスのプラット社と特許譲渡の契約を締結。これが契機となり息子の喜一郎は自動車産業への進出を決意していく。国家社会に貢献するという父の遺志を継ぎ、独自開発に執念を燃やして一九三六年AA型乗用車を完成させる。

織維機械館では、豊田佐吉の発明した木製人力織機からG型自動織機に至る十数種類の織機と主要技術の変遷を中心に、イギリスの産業革命当時から最新の紡織機まで実際の機械や機構模型で紹介している。この紡織機はほとんどが本物で、しかも動かすことが出来る。

自動車館では、豊田喜一郎が自動車の研究開発を始めた材料試験室や試作工場からAA型乗用車の開発、またトヨタがその時代時代に導入した最新の技術や設備を、これもまた本物の機械で展示している。

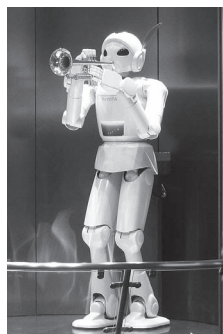
織維機械、特に織機は機構学の粋を集めたような機械である。それが目の前で動き、しかも技術の変遷を実際に見比べることが出来る。技術は極めると美しいというが、織機にもまたメカニカルな美しさがある。技術的な側面から、構造的な美しさにおいても、見飽きることはない。またG型自動織機の特長である自動杼換とたて糸切断自動停止の集団運転による実演も圧巻だ。当時の工場の雰囲気を再現しながらの実演は、まるで八〇年前の工場にいるような錯覚すら覚えてしまう。

一〇〇年前の織機と最新のロボット

これらの織機は完成してから一〇〇年近く経つが、いまだに現役で活躍している。産業技術記念館でも、「機械は動かし続けることでもっとも長く保存できる」という信念のもとで動態展示を続けている。竹や皮、糸といった当時の部品が入手しづらくなり、補給やメンテナンスに苦労しているが、少なくともあと五〇年は現役で動き続けるだろう。

ところで二〇〇五年の愛知万博で楽器を演奏していたトヨタパートナーロボットが、その後、産業技術記念館で一日六回トランプペット演奏をおこなって人気を博していたが、この六月に惜しまれつつも引退した。理由はロボットを制御するコンピュータの技術サポートが中止され、動いているうちに、と引退させたからである。

一〇〇年前の織機は世代を経て現役で活躍しているが、コンピュータ制御の機械は動かなくなつたときに技術サポートが中止されるとどうしようもない。これをコンピュータ一辺倒の技術への警鐘とみるのか、はたまた技術ノスタルジーとみるのか。産業技術記念館はこのような現実も我々に伝えてくれる。



トヨタパートナーロボット

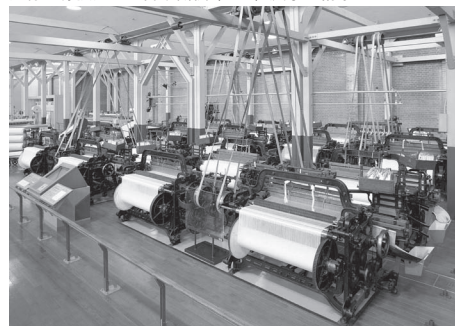


自動車館



AA型乗用車

無停止杼換式豊田自動織機（G型）展示の情景



産業技術記念館外観



写真はすべて産業技術記念館提供

面白いモノ その1

ハレのかたちとつくりもののひらりもの

笹原 亮二 民博研究戦略センター

「つくりもの」とよばれる造形物は、おもしろきこそが第一義。おもしろさを競い合う、つくりものの文化の中心となってきたのは、江戸時代の大阪ともいわれる。笑いに価値をおく現代の大阪気質ともつながっているのだろうか。モノがもつおもしろさを、あらためてかんがえてみよう。

つくりものという造形物

わたしたちの日々の暮らしの場には、衣類、食器、家具から車や家屋に至るまで、かたちや構造や大きさが異なるじつにさまざまなモノが存在する。それは、わたしたちがさまざまなモノを作り出し、手に入れ、身の周りに置いて日々の暮らしを営んできたことを示している。こうした暮らしの場への対し、わたしたちは、それがいかに役に立つか、いかに便利で使い易いかといった道具としての実用性や効率性を問題にしがちである。わたしが学んできた民俗学も例外ではない。民俗学はそうしたモノを、「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」(滋澤敬三)と見なし、「民具」とよんで論じてきた。

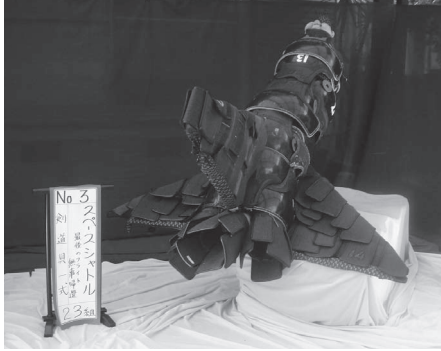
しかし、改めて考えてみると、わたしたちの暮らしの場には、実用性や効率性が必ずしも問題とされないモノも存在してきたことに気づく。例えば、祭や年中行事や人生儀礼などで見かける御幣・幟・傘・笠・仮面・燈籠・御輿・曳山といったモノである。これらは、いずれも形や色合いといった造形面にさまざまな工夫や趣向が凝らされていて、日々用いられる生活用具類とは大いに趣を異にする「ハレのかたち」とでもよべばいいだろうか。そんな

なハレのかたちの最たるモノが、武蔵大学の福原敏男氏や大阪芸大の西岡陽子氏らが「つくりもの」とよんで関心を寄せてきた造形物の一群である。

つくりものを目にするとき

各地では、祭や年中行事などの際に、地元の人びとが形や色合いなどに趣向を凝らして作り上げ、人びとの見物に供する造形物、すなわちつくりものを目にするることができる。民博がある近畿地方でも、例えば大阪府八尾市八尾木では、毎年九月下旬、町内一〇カ所程に、野菜や穀物などの農作物を用いてアニメのキャラクターやテレビ・ドラマの一場面などを作った「つくりもん」が飾られる。八尾木のつくりもんは寛政年間(一七八九〜一八〇〇)に八尾木不動尊の縁日でおこなわれたのが始まりとされる。滋賀県野洲市行畑で毎年七月におこなわれる愛宕地藏祭りでは、「調理用具一式」「竹製品一式」など同種の物品を用いてその年のニュースや人気アニメのキャラクターなどを作った「造り物」が、町内二〇カ所以上に飾られる。行畑の造り物は一七世紀半ばに地藏尊の祭の開始とともに始まり、当初は

行畑の造り物
「剣道道具一式 スペースシャトル最後のフライト無事帰還」



人びとが日々用いる農具一式で作られていたが、次第にさまざまな道具一式で作られるようになったという。

京都府福知山市夜久野町額田の一宮神社の秋祭では、野菜や野山の植物で時事的な話題や周知の物語の一場面などを作った「下だし」が町内数カ所に飾られる。額田の下だしは、百年程前に山車の上でおこなう子供歌舞伎が廃止され、そ

れに代わって野菜で合戦の様子を作ったところ好評を博したのを機に始まったものである。

京都の北野天満宮で一〇月におこなわれるずいき祭の「ずいき御輿」もつくりものの範疇に加えることができる。ずいき御輿はずいきで屋根を葺き、四方には人びとがよく知る物語の一場面などが野菜や乾物などで描かれる。これは、一七世紀初めに祭の供物の野菜や果物を用いて御輿を作ったのが始まりとされる。つくりものが出る祭や年中行事は、ほかに兵庫、岡山、広島

鳥根県出雲市直江一式飾り「歌舞伎 暫(かぶき しばらく)」

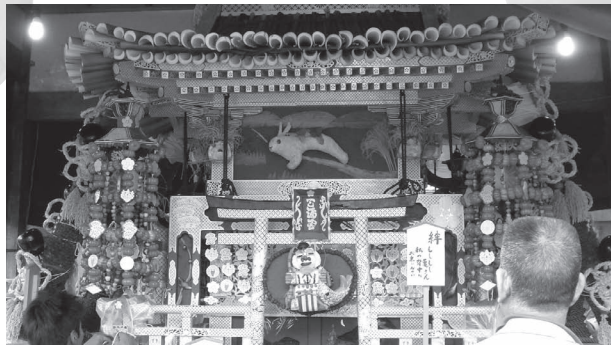


鳥取、島根、愛媛、大分、熊本など、各地でおこなわれているが、岐阜や富山を東限として西日本に限られる。こうした分布の偏りに関しては、江戸時代の大坂が、つくりものの趣向のネタ本を出版するなどつくりものの文化の中心となっていて、それが当時の大坂を起点とした物資や商品の流通とともに広まったことによると見る向きもあるが、確かなところは不明である。

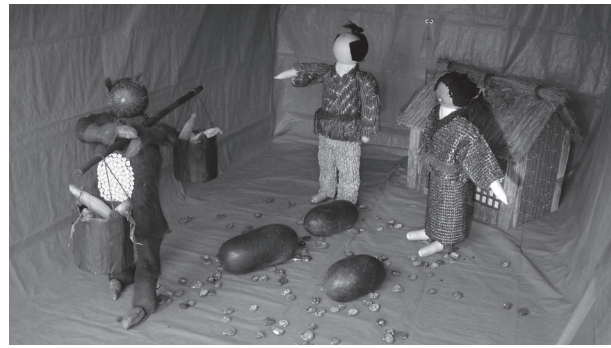
つくりものの競い合い

各地のつくりものは、用いる素材や作り方、呼称はさまざまであるにもかかわらず、類似の雰囲気や漂わせているように感じる。どこかのつくりものも、造形にことさらに趣向を凝らし、見物の関心を集めることが第一の眼目となっている。その結果、面白いつくりものが出来上がるが、もちろんすべてのつくりものが面白いわけではない。出来不出来があるし、当然、見たときに感じる面白さにも差が出る。だからこそ、どこでも作り手はより面白いモノを作ることを競い合うし、どこでも見物はそれぞれを見比べて面白さの優劣を評することになる。そうした作り手と見物双方の面白さを志向する想いや感覚が収斂するモノという点では、各地のつくりものは共通する。それが、類似の雰囲気を漂わせることに繋がっているのかも知れない。

確かにつくりものは面白い。しかもそれは、写真や常設館で見るとよりも祭や年中行事の現場で見たほうがはるかに面白い。それはなぜか。そのあたりに、つくりものがハレのかたちとして各地の人びとを魅了してきたわけを考える手掛かりがありそうである。



北野天満宮 ずいき御輿「絆——もしもし亀さん私の背中におのりなさい」



八尾木のつくりもん「狸と彦一」

救済から自立へのサポート

さまざまな危険にさらされながら、路上生活を強いられる子どもたち。その負の連鎖を断ち切り、彼らが自分自身の誇りを持ち、笑顔で暮らしていけるよう、救済自立支援のサポートを北タイでおこなうカルナーの会の活動を紹介します。

北タイのストリートチルドレン救済自立支援

カルナーの会は一九九九年からチェンマイの「アーサー・パッターナー・デック財団（以下V C D F）」のパートナーとして北タイのストリートチルドレンの救済・自立支援活動をサポートしている。彼らは多くの場合、タイ北部、または国境の町メーサイをとって、ミャンマー側から来た山岳民族の子どもたちで、幼いころから夜遅くまでナイトバザールや観光地で花売りや物乞いをしている。ほとんどの子どもたちは国籍も無く、路上やスラムで生活し、教育を受けられず、強制的に労働させられている。さらに性的搾取を受けたり人身売買の犠牲者になったりし、麻薬、H I V / A I D S などさまざまな危険が子どもの身近にある。二〇〇六年のV C D Fの調査では、チェンマイ県とチェンライ県のストリートチルドレンは少なくとも合計五〇〇人いる。V C D Fスタッフは彼らがいる場所に出向いて接し、人間関係を築いていく。そして活動を通じて彼らに希望を持たせ、新しい人生の道が選択できるように導きながら自らの力で再び社

会に向けて歩み出せるようにしている。現在、チェンマイ県とチェンライ県にそれぞれ、子どもの緊急避難場所の提供を目的とした「ドロップインセンター」および、路上生活から抜け出すことを希望した子どもたちが共同生活をする「子どもの家」というふたつの施設がある。

「カルナー」とはタイ語で「慈愛」の意味がある。本会では、「子どもの家」の運営支援をはじめ、さまざまな面で子どもたちの救済自立支援にかかわっている。たとえば「里親里子制度」は、救済された子どもたちに、里親を一对一で紹介し、その教育支援金によって通学させ、日本のお父さん、お母さんとして精神的な支えとなるよう、手紙や訪問などで交流をはかるものである。また、「教育ファンド」は、就学前のホームスクールや職業訓練校の学費に充てるため、会員からの寄付で設立・運営している。

アートセラピーと自立支援の場としてのドーデックギャラリー

レンの青少年のなかには生活の術をもたぬまま幼くして母になった子どもたちもいるが、幼子を抱えながらできる製品作りで収入をえることは彼女らの自立を助け、二世世代のストリートチルドレンを産む連鎖を断ち切るにもつながっている。

子どもたちの誇りのために

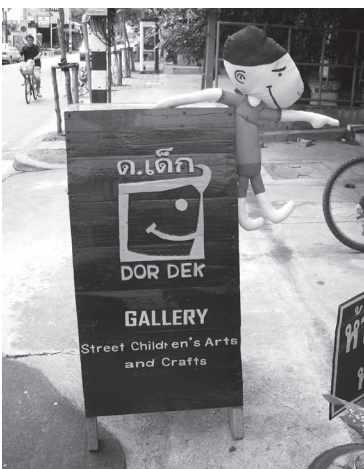
カルナーの会では、これらの製品をさまざまな催しや日本各地のフェアトレードショップなどを通じて販売している。日本では発送費やパーツの変動を考慮して現地より少し高めの価格で販売しているが、年度末に諸経費を除いた利益をV C D Fに送り、子どもたちのために役立てている。

日本での取り扱い数が増えてきたのはうれしいことだが、商業ベースに乗せるにはまだ至っていない。子どもの家の子どもたちは学業や共同生活のなかでの仕事が第一で、それらに支障が出ない範囲で週末や長期休みに商品作りをおこなっている。町なかの青少年たちに対しては、直接指導できるスタッフ数が少ないこともあって、一般の商品と同様に均等で一定レベルにそろえて商品を製作するにはまだ道半ばである。しかし、自尊心を高めることにもつながるこれらの製品作りは、彼らの生きる力として大きな効果を上げている。今後もひとりでも多くの子どもが自分自身に誇りをもって明るい笑顔で生きていくことができるように、活動を続けていきたい。

過酷な生育歴をもち、心身ともに深い傷を負っている子どもたちに、自信と誇りを取り戻してほしいと、子どもの家やドロップインセンターでは日常的に音楽や美術、農作業などさまざまな活動をおこなっている。例えば、子どもたちの興味関心に合わせた手工芸品の制作は精神面の回復や創造性を養い、自分の価値を見直し自信をもたせるためのアートセラピーとして効果的だ。また、自己表現力や集中力の向上にもつながる作品づくりは、将来自立するための技術習得にもなっている。これらをより発展させるために、V C D Fは二〇〇八年一月、チェンマイ市内に子どもたちの作品を展示販売する「ドーデックギャラリー」をオープンした。「子どものための」という思いを込めた名称である。手縫いマスコット、木の実やビーズのストラップ、手染め布を縫製したバッグなどを販売し、その売上げのうち、三〇パーセントを製作した子どもに還元、三〇パーセントを奨学金及び職業訓練のための基金、残り四〇パーセントをギャラリーの継続的な運営のための基金に分配されている。製品を作るのは大きく分けてふたつのグループである。ひとつは路上生活から抜け出して子どもから通学している子どもたち、もうひとつは元ストリートチルドレンで今はスラムなどに住んで自立しようとしている青少年たちだ。義務教育を終えて子どもを出た後、この基金を利用して銀細工の修行をし、オリジナルのシルバークセサリーを作るができるようになった青少年もいる。作った子どもの収入は、金銭管理教育の機会にもなる。また元ストリートチルド



チークの端材を糸鋸(いとこのこ)で切り、キーホルダーに



ドーデックギャラリー入り口の看板



端材に下絵



子どもの家でのマスコット作り



カード作成の下絵描き

太平洋の島々における 日本人移民の足跡

にわのりお
丹羽 典生 民博 民族文化研究部

南太平洋と日本

第二次世界大戦で敗北を喫するまで、日本は南太平洋に植民地などの形で政治経済的に進出していた。グアムの戦跡、パプアニューギニアの遺骨収集などの話題は、いまでも時折終戦記念日関係のテレビ番組でとりあげられることがある。それ以外だと、ニューカレドニアのニツケル鉱山や、オーストラリアのアラフラ海での真珠漁のための移民は、小説家などが題材としたこともあることから、比較的知られていようか。一方で、ほかの太平洋地域となると、おおかたの人には、忘却の彼方であろう。

「バンノー」でつながる日本とフィジー

かくいうわたしも同じであった。南太平洋フィジーのラウトカという町に滞在していたとき、街角に「Banno」という看板を掲げた寂れた倉庫を目にしたことがあった。しかし、それが何を意味するのかすぐには理解できなかった。バンノーとは、戦前、トンガ、フィジーを中心に太平洋地域で活躍



バンノーの看板、ラウトカ、フィジー、2002年

した日本人企業の名前である。手広く仲買業をおこなっていたため、トンガ、フィジーの人びとのなかには、ついでこのあいだまで、日本人をみると「バンノー」と呼びかけることさえあったほどだと言われている。

後日、日本においてバンノー（伴野）の創設者の子孫がいると仄聞して、和歌山県まで足を運んだことがある。居酒屋で知り合いと酒席を囲んでいたときのことである。わたしがバンノーとか、フレディというフィジー側の日本人移民の関係者や子孫の名前を口にしたところ、たまたま居酒屋に来ていた方が、伴野の遠縁にあたり一族の歴史談義に花が咲いたことがあった。さらにその方のおかげで、バンノーという会社の創設者の孫に当たる方のみならず、子期せぬことながらフィジーに残る日本人移民の子孫の遠縁にあたる方々ともお話をすることができた。ほんのちょっとした縁を通じて、日常慣れ親しんだ光景のなから、興奮することしきりであった。

みまぐ 私の逸品 男性用サンダル

ワラジは編物ではなく織物であり、ワラジと同様に稲ワラを使ってつくられるゾウリも織物である。これは一見すると日本のゾウリと見られかねないものであるが、イラン南部のバンダル・アツバース近郊の村でつくってもらったサンダルである。全長は二四センチメートルで、素材はナツメヤシの葉や茎である。

一九九九年八月、イランの織機や織物の資料収集と、機織りの映像取材のために、首都のテヘランに到着した翌日、国立博物館で、これとよく似た大きなサンダルが展示されていたのを見たことから、当初の予定の一部を変更して、その製作地であるバンダル・アツバースの近郊の村まで行くことにした。酷暑のなかを長時間にわたり、土煙を巻き上げながら現地まで車を走らせたものの、ナツメヤシのサンダルは、もはや過去の遺物となって安価な合成ゴム製のサンダルに取って代わられていた。そうしたなかで、やっとたずねあてたのが、このサンダルをつくってくれた少数民族バルルーチェの老人であった。

織物のかたちは常識的に四角形だと思いついていたわたしは、一九七〇年にはじめての海外調査でインドネシアのティモール島に行き、そこで輪状^{りんじょう}の織物の存在を知ることになった。しかし、その後世界各地でさまざまな異形の織物を見つけるきっかけになったのは、この楕円状^{だえんじょう}のサンダルとの出会いであった。なんの変哲もないサンダルではあるが、わたしにとっては、かけがえない逸品である。



道具は使わず、手と足だけでサンダルを織る老人

標本番号 H0217240
地域 イラン・イスラム共和国
受入年 1999年
特別展「世界の織機と織物
——織って！みて！織りのカククリ大発見」にて展示中

民博 民族文化研究部

吉本 忍

覚醒する自己

——四川省郊外の客家意識

かわい ひろなお
民博 機関研究員

客家とはよばれる人びとは、最近、日本でもだいぶ知られるようになった。彼らは、漢民族の一員であるが、独自の言語と文化をもつ集団であるといわれる。二〇〇八年に土楼という円形ドーム型の集合住宅がユネスコの世界文化遺産に登録されたから、その住民である客家の知名度はますます高まった。客家はおもに中国の東南部に住むが、そこから国内外の各地に移住している。筆者は昨年、成都にある客家の街を訪れた。

客家の街

成都は、中国西南部にある四川省の省都である。四川省といえば三国志、四川料理、パングで有名などところだ。四川省には、四川語を話す漢族やチベット系の少数民族などがおもに住んでおり、客家は少数派である。だが、現代中国に影響をおよぼした人物のなかには四川省の客家がいる。鄧小平や朱徳はその代表である。四川省の客家は省の東南部に集中している。ただし、成都の都心から約十数キロメートル離れた東山の一带にも客家の居住

地がある。特に、その洛帯鎮というところでは、近年、客家をモチーフとした街づくりをおこなっている。ここは今や成都における観光地のひとつとなっている。

文化資源としての客家

洛帯鎮に着くと、週末でもないのに大変な混雑ぶりであった。門をくぐると観光用に整備された街並みが姿をあらわす。この光景は中国東南部の客家の街とは異なる趣がある。大通りを歩いていくと、街なかには客家の二文字を看板とした店が並んでいる。店を覗いてみると、白鳥の卵や、涼粉というきし麺にも似た麺類が、客家料理としてあちこちで売られていた。食べると驚くほど辛い。中国東部の客家の街では食べたことがない。地元の人に聞くと、これは「悲しみの涼粉」（傷心涼粉）というらしい。四川省にどこでもある「涼粉」をベースとし、涙が出るほど辛くした創作料理であるとのことだ。

大通りから外れて路地裏を歩いていくと、突如として円形の大きな建物があらわれた。



洛帯鎮の街並み

合ったシンボルを造らねばならないというのである。客家を用いた街のイメージづくりは、もはや食品や建築物にとどまることはない。洋服、ピアノ、工芸品、パングのぬいぐるみまでが、客家の名のもとで売られていた。

客家としての覚醒

洛帯鎮に行つて「あなたは客家か」と聞くと、今なら、ほとんどの住民が首を縦にふるだろう。しかし、現地で話を聞くと、彼らが客家ということばを知ったのはじつは最近のことなのだそうである。彼らは二〇年ほど前

まで、「広東人」などと自称していた。だが、一九九〇年代に入ると、彼らは客家として学者たちに「発見」されるようになった。二一世紀に入り、町役場が観光化を進めると、学者たちは客家を利用した街並み保存のプランを提示した。そして、客家を使った大掛かりな街づくりが進められていくうちに、地元住民は客家としての自覚をもつようになったのだという。

中国では近年、民族集団の特殊性を利用して、都市のイメージづくりをすることがある。成都でもまた、客家というブランドを用いて

中国内外の観光客を集め、収益をえる戦略を推進している。成都において客家は、外部からもち込まれた利潤追求の道具であった。東山一带における住民の客家意識は、その一環として後に喚起されたものである。客家としての覚醒は、このように現代の政治経済情勢と切り離して考えることはできない。客家の自己意識の形成を理解するためには、社会状況の変化との関係に着目してみる必要があるだろう。



土楼型の建築物



洛帯鎮の店舗



四川客家の観光用人力車

9月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、
話題や内容は実に多彩。
どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

9日
(日曜日)

話者：関本照夫（国立民族学博物館 特任教授）
話題：インドネシアの市場と商人
会場：東南アジア休憩所

23日
(日曜日)

話者：上羽陽子（国立民族学博物館 助教）
話題：南アジアの衣装と文様表現
会場：南アジア展示場

30日
(日曜日)

話者：吉本 忍（国立民族学博物館 教授）
話題：東南アジアの織機と織物
会場：東南アジア展示場

1年間みんぱくに何度でも入館できる 「みんぱくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

日本中で昨年の震災の痛ましい惨事と多くの教訓を記憶にとどめようとする努力が続けられている。犠牲者への鎮魂と備えを怠ることへの戒めをこめ、記憶がうすれることに敏感すぎるほどの警鐘がならされつづけるのも当然のことだろう。しかし、どんな記憶であろうと忘却からのがれるのは容易ではない。まして、被災地から遠くにすみ、悲惨な経験を共有しないものにとっては。第二次世界大戦や原子爆弾の残した記憶も半世紀すぎた今日、世を超え多くの障壁にもかかわらず引き継がれてきたとはいえ、戦争のあったことさえ知らない世代の出現が現実となった。

東北の被災地ではかつて先人がのこした津波到達点の石碑や年中行事の口碑にこめられてきたメッセージを再評価しようとする動きがあるという。たしかにインターネットなど電子メディアで行きかう過剰な情報に必要な情報さえ埋没しそうな今、モノと生のコトバの伝える力も顧みる価値はあろう。しかしそれらの存在自体が忘れ去られぬ手立てはあるのだろうか。企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」からさきと何かを学べるはずだ。
(庄司博史)

●表紙：宮城県・戸倉波伝谷（とぐらはでんや）地区の戸倉神社でかつて使用されていた獅子頭。地震により破損した右耳を修復・補強し、企画展に展示される。

次号の予告

特集

数に操られる、数を操る（仮）

月刊みんぱく 2012年9月号

第36巻第9号通巻第420号 2012年9月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 八杉佳穂

編集委員 庄司博史（編集長） 小川さやか 樫永真佐夫

久保正敏 菅瀬晶子 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一敏

制作・協力 財団法人 千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

